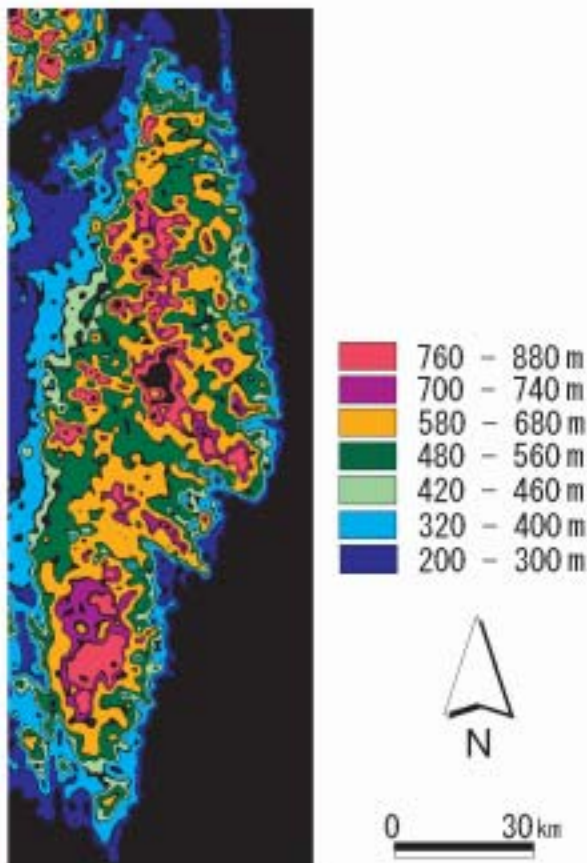
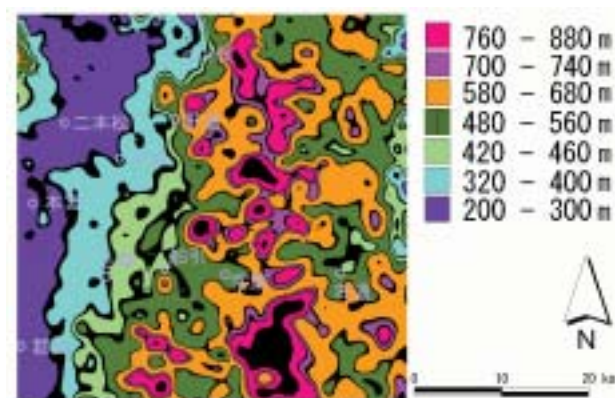




図－7 阿武隈山地全体の標高帯の平面的分布。

そこで、標高の連続性と平面的な広がりのみに着目し、早川・三島（1997）の7段の小起伏面に相当する標高帯の区分図を介して、南・北阿武隈山地の小起伏面の対比を試みた。図－7に、図－6の右図と同じ要領で作成した阿武隈山地全体の標高帯区分図を示す。以下、小池（1968）が郡山～二本松間と磐城石川～郡山間で示した小起伏面の分布図を参照しながら、対比する。小池（1968）は、これらの地域において小起伏面が標識的に分布していると述べている。



図－8 郡山～二本松間の標高帯の平面的分布。

（1）郡山～二本松間

図－8に、郡山～二本松間における北阿武隈山地の標高帯区分図を示す。図－8は、福島県内に相当する。

小池（1968）は、この地域において花こう閃緑岩を切って発達する舞木面の分布について述べている。舞木面は、舞木上位面（標高310-330mに分布。以下同様。）と舞木下位面（280-290m）に細分され、いずれも背面はよくそろいが、稜線上にはわずかな平坦面をみるに過ぎないという。

小池（1968）と図－8を比較すると、舞木下位面と分布が一致するのは図－8の標高帯200-300mのうち二本松市周辺である。舞木上位面と分布が一致するのは、図－8において、岩代町小浜付近の標高帯320-400mである。三春町まで南下すると、この標高帯には小池（1968）の三春面（360-380m）も含まれていることがわかる。三春面は、下位の舞木上位面とは比高30mのかなり明瞭な崖で境されるというが、図－8の標高帯320-400mでは、舞木上位面と三春面の細分類は表現されていない。

三春面より上位に分布する熊耳面（400-440m）は、三春面と同様、新期花こう岩の占める面積が広いいため小起伏面の発達が悪く、北方の針道面（400m程度）と連続する（小池，1968）。図－8の三春町～船引町間の標高帯420-460mは熊耳面と一致するが、この標高帯を北上すると、針道面が分布する東和町針道付近では幅が狭くなり、この標高帯を針道面と対比するのは困難である。

熊耳面より上位に分布する船引面（480-500m）は、古期花こう閃緑岩を切って発達する。そして、船引面背面にスムーズに移化する小支谷は大滝根川やその支流の主谷底とは、主谷底へ降りる地点に遷急点を持つことが多い（小池，1968）。図－8で船引面と対比されるのは、船引町～常葉町の標高帯480-560mである。この標高帯は、阿武隈川流域区と太平洋流域区の分水界を越えて、都路村古道付近にも分布するが、これは小池（1968）が船引面と対比している古道下位面（440-460m）の分布と一致する。

船引面より上位に分布する常葉面（530-560m）は、かなり開析が進み、阿武隈川流域区と太平洋流域区の分水界付近まで分布する（小池，1968）。図－8で常葉面と対比されるのは常葉町付近の標高帯580-680mであり、都路村古道付近の古道上位面（520-550m）にも対比される。図－8の標高帯580-680mは、図－7を見ると、北阿武隈山地の太平洋流域区と南阿武隈山地に広い面積を占めて分布している。

（2）磐城石川～郡山間

図－9に、磐城石川～郡山間における北阿武隈山地の標高帯区分図を示す。図－9は、福島県内に相当する。

小池（1968）は、石川町付近で三春面に対比される曲木面（340m-400m）について述べている。その分布は、図－9の標高帯320-400mに一致する。

また、平田村小平付近に分布する小起伏面（500-580